

1. これは、あなたがたの神、主が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行なうためである。
2. それは、あなたの一生の間、あなたも、そしてあなたの子も孫も、あなたの神、主を恐れて、私の命じるすべての主のおきてと命令を守るため、またあなたが長く生きることのできるためである。
3. イスラエルよ。聞いて、守り行ないなさい。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたの父祖の神、主があなたに告げられたように、あなたは乳と蜜の流れる国で大いにふえよう。
4. 聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。
5. 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。
6. 私がかぎょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。
7. これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。
8. これをしるしとしてあなたの手結びつけ、記章として額の上に置きなさい。
9. これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。
10. あなたの神、主が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地にあなたを導き入れ、あなたが建てなかった、大きくて、すばらしい町々、
11. あなたが満たさなかった、すべての良い物が満ちた家々、あなたが掘らなかつた掘り井戸、あなたが植えなかつたぶどう畑とオリーブ畑、これらをあなたに与え、あなたが食べて、満ち足りるとき、
12. あなたは気をつけて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出された主を忘れないようにしなさい。
13. あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。
14. ほかの神々、あなたがたの回りにいる国々の民の神に従ってはならない。
15. あなたのうちにおられるあなたの神、主は、ねたむ神であるから、あなたの神、主の怒りがあなたに向かつて燃え上がり、主があなたを地の面から根絶やしにされないようにしなさい。
16. あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。
17. あなたがたの神、主の命令、主が命じられたさとしとおきてを忠実に守らなければならない。
18. 主が正しい、また良いと見られることをしなさい。そうすれば、あなたはしあわせになり、主があなたの先祖たちに誓われたあの良い地を所有することができる。
19. そうして、主が告げられたように、あなたの敵は、ことごとくあなたの前から追い払われる。
20. 後になって、あなたの息子があなたに尋ねて、「私たちの神、主が、あなたがたに命じられた、このさとしとおきてと定めとは、どういうことか。」と言うなら、
21. あなたは自分の息子にこう言いなさい。「私たちはエジプトでパロの奴隷であったが、主が力強い御手をもって、私たちをエジプトから連れ出された。
22. 主は私たちの目の前で、エジプトに対し、パロとその全家族に対して大きくてむごいしるしと不思議とを行ない、
23. 私たちをそこから連れ出された。それは私たちの先祖たちに誓われた地に、私たちをはいらせて、その地を私たちに与えるためであった。
24. それで、主は、私たちがこのすべてのおきてを行ない、私たちの神、主を恐れるように命じられた。それは、今日のように、いつまでも私たちがしあわせであり、生き残るためである。
25. 私たちの神、主が命じられたように、御前でこのすべての命令を守り行なうことは、私たちの義となるのである。」

説教

この戒めは、「聞け、イスラエル」と訳されるヘブライ語「シェマー、イスラエル」から「シェマ」と呼ばれ、最大の戒めとして知られています。後のユダヤ教は、これを朝晩唱えるべきと決めました。そしてイスラエル人は、この教えを極めて重要視し、戒めの大切さを体験的に子孫へ伝え残していくため、一つの習慣を生み出します。その習慣は、今でも熱心なユダヤ教徒の間で行われています。彼らは、4節を読む時、「聞け、イスラエル、我らの神、主は唯一の主である（*シェマー・イスラエル*、*アドナイ・エロヘヌ*、*アドナイ・エホヴァ*）」を、一息で、息の続く限り、もう息が切れて声が出なくなるまでわざわざ引き延ばして読むのです。それは、息の続く限り、すなわち生命ある限り、「我らの神、主は唯一の主」である信仰を告白し続けることを意味しています。

前の第五章では、シナイ山で神からもらい受けた十戒を学びましたが、その十戒の語り出しは、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から救い出した、あなたの神、主である」という神の宣言でした。苦しい奴隷生活していたイスラエルを救い出してくださったのは、他でもない、神ご自身です。神は、イスラエルを愛して、この世に造り、最も苦しい滅びの中から救い出してくださいました。この方こそ神であり、他には神はありません。だからこそ、「あなたには、わたしの他に、他の神々があってはならない」と神はお命じになりました。

この「シェマ」に於いても、「聞け、イスラエル！」と呼びかけ、注意を喚起した後、モーセはこう宣言します。「我らの神、主は、唯一の主である。」神は天地の造り主にして、我らの創造主であります。この方以外に神はありません。イスラエルの神は、「主」の名が意味するように、永遠の存在者にして創造主です。私たち人間は、この神に愛され、神によって造られ、生かされています。この方にお世話になっていない人はどこにもおりません。人間は勿論のこと、犬も猫も、鳥も魚も虫も、命あるすべてのもの、生きとし生けるすべてのものは、この方によって造られ、生かされています。この方が神であり、この方だけが神なのです。

「聞け、イスラエル」と命じ、「我らの神、主は、唯一の主である」と宣言したモーセは、次にこう呼びかけます。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」(5) 十戒の場合がそうでしたが、「あなたの神、主を愛しなさい」との呼びかけには、「神に愛されているのだから」との前提があります。「神に愛されているイスラエルよ、あなたがたは神に愛されているのだから、あなたがたもまた神を愛しなさい」というわけです。

イスラエルは、神に愛されてこの世に造られ、神に愛されて、最も苦しい人生のどん底生活から救い出されました。エジプトの奴隷だったのに、今や神の民です。それは神に特別に愛されている故の恵みでありました。このすばらしい恵まれた人生へと召してくださったのは、神です。他のいかなる存在にも因りません。ひとえに、神が彼らを愛して、彼らを滅びから救い出してくださいました。だからこそ、「あなたの神、主を愛しなさい」と言われます。神の愛に感謝して、神に愛されていることに感謝して、その神の愛に答えて、あなたもまた「あなたの神、主を愛しなさい」と言われるのです。

「あなたの神、主を愛しなさい」とは、実際には5章に登場した十戒の、特に前半の戒めを守ることになるのですが、既に十戒については述べたので、それを総括するかの如く「あなたの神、主を愛しなさい」と言われます。十戒を守ることは神を愛することなのです。

先には「あなたには、わたしの他に他の神々があってはならない」と命じられましたが、ここでは「我らの神、主は、唯一の主である」と宣言されます。人が認めようと認めまいと、人がどうあろうが、「我らの神、主は、唯一の主」なのです。永遠に変わることなく「我らの神、主は、唯一の主」です。問題は私たちです。「唯一の主」である「我らの神」に対してどうあるかが問われます。そして、モーセはこう勧めます。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

「愛する」とは、夫婦や親子の関係で使われる言葉ですが、唯一の父、あるいは夫である「あなたの神、主」を誠実に愛することが教えられます。イスラエル人は、「心」を知性、感情、意思という人格の中核と考えました。「二心」抱く浮気は、忠誠心あるいは誠実さの欠如のあらわれとなります。「精神」は「魂」のことで、人間の活力、命、存在の源です。「力」は、自分の能力や所有する一切のもの、全財産のことです。そして、「尽くして」とは「ありったけを用いて」を意味します。頭だけ、口先だけではない、小手先でもなく、知性・感情・意思という全人格挙げて、全身全霊で、しかも、いのちある限り、いのちを賭けて、というより、いのちを神に捧げて、神が私にくださった自分のあらゆる能力、財産、地位、名誉の一切をフル活用して、「あなたの神、主を愛しなさい」と言うのです。

16世紀の宗教改革者カルヴァンは、これを次のように適切に解説しました。「魂を尽くして神を愛せよとは、いわば神の愛のためには生命をも惜しんではならないというに等しい。心ないし思いを尽くして神を愛せよとは、例示して言えば、他の一切の事よりも神を優先することである。…最後に、力を尽くして神を愛せよとは、全身全霊、またすべての持ち物を用いて神を愛することであり、あたかも神のために貧乏になることが要求されているかの如くである。」

「シエマ」が最も大切な戒めであることから、モーセはこれを私たちの日常生活の中心に据えるための具体的なあり方を提言します。

その一つ目はこうです。「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」

(6) まずは、私たち自身の人格の中心である「心」に「刻む」のです。

次には、「これをあなたの子どもたちによく教え込む」ことです(7)。「教え込む」とは「鋭く痛烈に教える、たたき込む、繰り返し繰り返し教える」の意味で、とにかく毎日毎日、繰り返し繰り返し、子どもが理解するまで、徹底的に、神の戒めを子どもに教育しなければなりません。それで、イスラエルではこれを実践します。おもに父親が、毎日、子どもに律法を教育しました。

三つめは、「あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱え」ることです(7)。家にいる時も外を歩く時も、そして、寝る時も起きる時も、律法を「唱える」のです。

さらには、「これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい」、「これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい」とまで言われます(8-9)。勿論、神の律法は「心に刻む」だけで充分なのです。でも、内面的な理解に留まることなく、それに加えて、外面的にも、それをあちらこちらに記せと言われます。まずは、自分がいつでもよく見ることのできる自分の「手」に、次には、自分以外の人が、それこそ顔を合わせる度に真っ先に目に入る場所である「額の上」に、さらには、自分が帰宅する度に、あるいは他人が自宅を訪問する度に、必ず目に入る「あなたの家の門柱と門」に律法を「書き記す」よう教えられるのです。

こうして、何より大切な神の律法は、私たちの生活の友となります。家にいる時にも外を歩く時にも、

寝る時にも起きる時にも、律法は私たちと共にあります。身に括り付けた律法が、門柱と門に書き記された律法が、日々私を教え、警告し、罪から守ってくれるものとなります。そして、私たちの子々孫々、さらには隣人たちに対しても、神を証しするものとなるのです。

教えられた通り、いのちある限り、神のことばを聞き続けて、これを伝えていくものになりたいと願います。